

20016

OCT 画像の血管内腔の検討 IVUS 画像との比較

¹桜橋渡辺病院心臓・血管センター、²桜橋渡辺病院心臓・血管センター

水谷 覚¹、永井 宏幸²、岡村 篤徳²、藤井 謙司²、佐藤 洋一¹、岡田 裕介¹、伊保 純一¹、森重 美穂¹、高山 雄紀¹、織原 克年¹、小坂 祐紀¹

背景 OCT を用いての PCI において、血管径を過小評価している可能性があるといわれているが、あまり報告がない。今回、我々は、PCI 時に OCT 及び IVUS を同時計測した症例を比較検討し、OCT における血管内腔の評価について検討した。方法 症例は 2008 年 12 月より OCT 及び IVUS を同時計測した PCI 連続 50 症例。IVUS は Atrantis Pro を用いた。計測前に十分な冠動脈拡張を得るためにニトログリセリンの冠動脈内注入を行った。Stent 再狭窄症例及び Stent 留置症例 (Stent 留置後) で、Stent 留置部位から前後 mm 部位の血管径及び Stent の内径及び面積を、OCT 及び IVUS を用いて計測した。結果 Stent の内径及び面積は、有意に OCT で小さく (内径 $p=0.0001$ 、面積 $p=0.0001$)、また血管径及び血管内腔面積も有意に小さく (血管径 $p=0.0001$ 、内腔面積 $p=0.0001$) 測定され、血管径については長径 86.32%、短径 93.11%、内腔面積については 80.32% IVUS と比較して過小評価された。まとめ OCT における血管径、内腔面積は、我々が日常の PCI で使用してきた IVUS と比較し過小評価していると考えられ、OCT guide における PCI において十分考慮する必要があると考えられた。